

## ハイデルベルク信仰問答講解説教9「たとえ涙の谷間に」(2011年10月2日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

主の御言葉は正しく／御業はすべて真実。主は恵みの業と裁きを愛し／地は主の慈しみに満ちている。御言葉によって天は造られ／主の口の息吹によって天の万象は造られた。主は大海の水をせき止め／深淵の水を倉に納められた。全地は主を畏れ／世界に住むものは皆、主におののく。主が仰せになると、そのように成り／主が命じられると、そのように立つ。主は国々の計らいを砕き／諸国の民の企てを挫かれる。主の企てはとこしえに立ち／御心の計らいは代々に続く。(詩編33：4-11)

同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてください。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。(ローマ8：26-30)

## 【説教】

今日は、第九主日、問26を通して、共に聖書の示す福音に耳を傾けてまいりたいと思います。この部分から使徒信条についての問答が始まります。信仰問答は、既に問22で、これをわたしたち信仰者が信じるべき福音の要約であるとし、また公同の疑いなきキリスト教信仰箇条としてしています。そういう言葉に改めて礼拝で毎週告白する使徒信条の重さを感じます。この短い文章に時代も場所も民族も越えて告白する普遍的信仰がある。わたしたちはそういう意識を持っているでしょうか。

そしてそういう告白だからこそ、まず問26の問いかけにあるような姿勢が求められると思います。「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と唱える時、あなたは何を信じているのですか。この告白を口にする時に、あなたは何をそこで信じているか。これは信仰告白を重んじる教会において重要な問いかけであります。ただ語んじていけばよいというのではない。礼拝の中に取り入れていけばよいということでもない。そこで何を信じて告白しているかが重要なのであります。時として、ただ言葉だけ、ただ形だけになってしまうことがあります。その時に、信仰告白は冷たい言葉の羅列になります。そこには命がないのです。その告白が本当に命のある、血の通ったものとなって初めて礼拝の中でこれを告白する意味があります。そのために、わたしたちは自覚的な信仰をもってこれを告白する必要があります。これはもちろん、父なる神さまだけのことでなく、使徒信条全体、またすべての信仰告白においても同じように捉えるべきであります。信仰問答はそのような信仰告白に向かう私たちの心をここに教えています。

さて、早速、使徒信条の第一項「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」を見ていきたいと思います。わたしたちはどのような信仰をもってこの告白を告白するのでしょうか。まず答えのところを読みます。この一続きの文章の中に、すでに重要なことが幾つも言われています。まず「天と地とその中にあるすべてのものを無から創造され」とあります。「無からの創造」これも聖書の信仰において重要な教理の一つです。この根拠は言うまでもなく創世記の第一章です。「はじめに神は天地を創造された」と聖書は書き始めます。はじめに天地があって、すべての材料が整っていて、そこから神さまはいろいろとお造りになったのではない。初めは神さまだけなのです。そこからすべてが造られた。すべてのはじまり、根拠は神さまである、そういう信仰です。これは言葉を変えて言えば、神さまがおられなければ、世界は成り立たない。世界は空しいということです。これは人間の存在もそうです。人間は自然に出来上がったものではありません。神さまによって、しかも神さまにかたどって造られた。それは神さまの御言葉に生きる者として、神さまと心

を通わすことができる存在として人間は造られたということですから。それだけ人間には神さまとの深いつながりがあるのです。もしこのつながりがなければ、人間は無に帰する。人間はむしろなしい存在になる。それが聖書の人間理解です。

ところが、人間は自らこの深いつながりを捨ててしまいます。それは創世記第三章にあるアダムとエバの墮罪物語が示しているとおりです。神さまとの約束、御言葉を捨てて、人間は自分勝手に生きようとした。そこで人間の存在は神さまの前から失われ、空しいものになりました。そしてこの罪ゆえに、空しさゆえに、わたしたちの関係も、またわたしたちが治める世界もまた空しくなるのです。それが人間の罪の現実であります。

しかし、神さまは人間をこの空しいままで終わらせようとはなさいません。「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」(イザヤ46：4)と言われるように、神さまは最後まで、御自身がお造りになられたものに対して責任を持ってくださる。このわたしたちを罪から救い出し、もう一度、そのつながりを回復してくださるのです。そのために神さまは独り子イエス・キリストをお与えになりました。このキリストゆえに、わたしたちは神の子であり、神さまはわたしたちの父となる。このキリストゆえにわたしたちの存在は空しくならず、この世界も空しく終わることはない。この信仰問答が何よりもここで伝えようとしていることは、そのことです。

信仰問答は、単にこの世界の創造主として、神さまを信じてはいけません。答えの前半をもう一度読みます。ここでは何よりイエス・キリストとの関係が言われています。「主イエス・キリストの永遠の御父」であるお方が、御子キリストのゆえに、わたしの神またわたしの父であられる。キリストを通してこのわたしと関わられる、キリストを通してこの世界と関わられる、そういう神さまとして信じているのです。ここがこの問答の箇所です。

単に、この世界を神さまが造られたとする信仰は甚にいくらかでもあるでしょう。例えばギリシャ神話がそうです。ギリシャ神話の神であるゼウスは、「神々の父、人間の父」と呼ばれます。それはゼウスが世界の創造主であるという信仰があるからです。また漠然とこの世界は神さまによって造られたと信じる人は案外多い。そういう信仰とこの問答が言い表す信仰はどう違うのでしょうか。

「神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された」(ヨハネ3：16)とあります。それはこの造られた世界に向かう愛ではないでしょうか。それは独り子をお与えになるほどの愛です。この愛をもって神さまは世界を創造される。ただ造られたのではない。愛をもって造られたのです。だからその愛

は、わたしたちを子として回復することに向かいます。造った造りっぱなしではない。ちょうど放蕩息子の父親が息子を喜んで迎えたように、息子の帰りを待ち、愛をもって受け入れる。そのように人間を、この世界を受け入れ愛されるのです。この父子の関係、それはもちろん父なる神さまと御子イエス・キリストとの関係であります。その愛の交わりをわたしたちにもお与えになるのです。わたしたちも神さまを父と呼び、神さまもわたしたちを子よと呼びかける、そういう愛の交わりを創造する道を神さまの方から開かれたのです。

今日は、ローマの信徒への手紙第8章のところを読みました。29節に「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとはじめ定められました」とあります。「御子の姿に似たものにしよう」それはわたしたちを神の子としてもう一度創造されるということに他なりません。そしてこれもまさしく無からの創造です。わたしたちには神の子とされる可能性は全くありませんでした。罪に墮ちていたのです。でもそのわたしたちが全くの無から神の子として再創造されるのです。そのために御子の命がさげられました。そして更には、この御子の命に与らせるために、聖霊が働くのです。27節には「霊は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです」とあります。実にこのわたしたちの回復、再創造のために、父・子・聖霊なる三位一体の神さまが働かれるのであります。あの天地創造に始まった神さまの創造の御業はそのように父・子・聖霊によって完成へと向かうのです。

そのような神さまの御業を覚える時に、わたしたちは確かな信頼をもって神さまにすべてを委ねることができないでしょうか。信仰問答の後半部分を読みます。御子のゆえに、わたしたちを子として迎えてくださる、そのような神さまの愛を知るならば、わたしたちのこの人生の受け止め方が大きく変わります。

それはまず「必要を満たしてください」ということ。ここであげられている聖書の御言葉は、山上の説教にある「何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない・・・あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存知である。ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」(ルカ12:29-31) 先週は教会の研修会で祈りについて学びました。特にこの『ハイデルベルク信仰問答』が祈りをどのように考えているか。実際にその問答を追いながら学びました。そこでは「霊的に、肉体的に必要なすべて」を祈り求めること、しかも、「主キリストのゆえに、この方がわたしたちの祈りを確かに聞き入れてくださるという、揺るがない確信を持つ」ということでありました。それは今日の間答にもつながっています。

ここでのイメージは、ちょうど親が子どもの必要を知って、それを満たすことであり、子どももまた親を信頼してその養育のもとにあるということです。ただ子どもは自分で自分の必要を知らない。見当違いのものを必要と思い、それを求めることがあります。親はその子どもの言いなりになることはありません。子どもが欲しがると言って、お菓子ばかり与える親がいるでしょうか。子どもの必要はすべて親が理解しているのです。だから時として、子どもが願うこととは違う仕方が必要を満たされる場合があります。でもそれが子どもにとって最善のことなのです。そのようにわたしたちに必要なものを神さまはご存知です。その時に最善の仕方、必要なものを与えてくださる。わたしたちは神さまに対してそういう信頼を持っているのです。それが神さまを父とすることです。

またこのことは、「たとえこの涙の谷間へ、いかなる災いを下されたとしても、それらをわたしのために益としてください」ことを信じて疑わないのです。こういう深い信頼の姿勢を作ります。「涙の谷間」という言葉はラテン語では「悩み多い生涯」と訳されます。実際にわたしたちの人生は悩み多い生涯です。悩みなんてない。そんな人はおりません。いつでしたか、子どもに「いいね、悩みなんかないでしょ」と言いましたら、「そんな

ことはない。わたしだって幾つもの悩みがある」と言っていました。大人は大人で、また子どもは子どもでも、その時々悩みがあるものです。時として涙の谷間に落とされ、そこから抜け出すことができないと思われるような深い悩みに襲われることもあります。

でもそれも神さまがわたしたちの人生に必要なこととして与えておられる。その悩みがなければ、決して理解することができない、知ることのないものがたくさんあるのです。「それらをわたしのために益としてください」これはローマの信徒への手紙8:28「神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています」これが根拠となる御言葉です。ここを愛唱の聖句とされている方々も多いと思います。ただこの「益」というのは、わたしの願望通りになるということではありません。それはローマの信徒への手紙で、そこに続く言葉からも明らかなように、キリストの救いを目指しています。この益とは、キリストの救いのことです。わたしたちが罪赦されて、神の子とされる。神さまを父と呼ぶ。人生に起こるすべてのことが相働いて、わたしたちを神さまへと導くのです。

家族を失った深い悲しみが、わたしたちを教会に導くことがあります。病気の苦しみが、祈りを深くすることもあります。いっそう信仰に向かうのです。それは奇跡としか言いようがありません。でもそのようにして神さまは驚くべき仕方、わたしたちを救いへと導くのです。そのような全能の父なる神さまの御手がわたしたちの上に今日も置かれています。祈りをささげます。

天の父。あなたはこの天地万物をお造りになられました。そしてそれを全能者として、また父として守り、保ってくださいます。それは御子をわたしたちにお与えになられるという仕方、この世界を、そして人間をあなたのもので新しく創造されるのです。そこに深いあなたの愛が注がれていることを感謝します。どうぞこの神さまに信頼して歩むことを得させてください。どんな悩みにありましても、御子のゆえにわたしたちの全能者であり父であるお方が最善のものを備えてくださることを信じることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。